

三つのチェックリストを使って 上手な登校刺激を

不適切な登校刺激はするべきではありません。しかし、子どもの状態を見て「ここぞ」というときは刺激をしなければなりません

小澤 美代子

さくら教育研究所所長

不登校は大きな教育的課題

不登校が大きな教育的課題となつてから二〇〜三〇年は経っています。その間、一向に減ることはなく、平成一三年度をピークに減少に転じたかに見えましたが、実際は児童生徒数の減少と照らし合わせれば、ほぼ横ばいとなっています。

不登校が教育的課題であるのは、不登校（欠席）により学校教育（学習と社会

性）を受ける機会を失うからです。学習と社会性は、自立にとって不可欠な力です。不登校により子どもたちの将来にわたる自立の力が損なわれることが最大の問題であると考えられます。

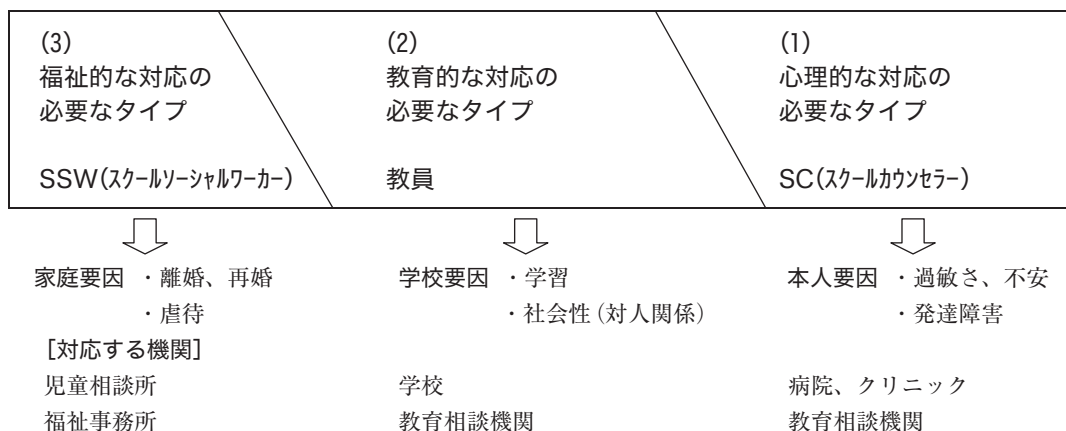
さらに昨今話題となつている社会的ひきこもりとの関連があります。現在、社会的ひきこもりの人は一五〇万人前後と言われ、研究によるとその最初のきっかけの半数が不登校であるとされています。ひきこもりが長期化すると、本人の人生

にとつても、また将来の社会保障の面からも大きな損失になると考えられます。もちろん「ひきこもりになる最初のきっかけの半数が不登校」は、不登校の半数がひきこもりになるということとは違います。毎年の不登校数の一〜二割がひきこもりに繰り込まれていっていると推測されます。しかし、ひきこもりのものとも大きなきっかけが不登校であるという事実は重く、その意味からも不登校への対応は重要な課題であると言えます。

正しい不登校理解のために

このように大きな課題を含む不登校対応が、これまで適切になされてきたかと言えば、必ずしも十分であったとは言えません。国は平成四年三月に「登校拒否（不登校）問題について」の報告書を出し、それを受けて適応指導教室の設置、そこへ通う場合の出席扱い、通学定期の発行、スクールカウンセラーの配置などの施策を行いました。予算的にも大きな金額を投じて行われた諸事業にもかかわらず、その後も不登校は増え続け、平成九年度

図1 不登校の全体像



には一〇万人を超え、さらに増え続けました。

この間、相談機関で仕事をしていた私は、様々な施策や、学校や関係機関の努力にもかかわらず、なぜ不登校がはつきりとした形で減らないのか疑問に思っていました。そこで不登校を様々な視点から分析してみると、不登校の全体像が把握されていないのではないかという結論を得ました。また、登校刺激が適切になされていないという危機も抱きました。

不登校の全体像

不登校は心の問題だととらえられがちでしたが、多くの事例を分析していくと、実は幅が広く、大きく三つのかなり異なるタイプに分けられました(図1)。

(1) 心理的な対応の必要なタイプ

子ども自身が過敏さや強い不安をもっている性格要因と、発達障害などの生得的な脳機能障害をもっている場合で、そのために不適応になりやすいものです。

(2) 教育的な対応の必要なタイプ

学校生活における問題、特に「学習」

と「対人関係」でつまずきや挫折があった場合です。

(3) 福祉的な対応の必要なタイプ

家庭生活の負因が大きかったり、家庭生活そのものが成り立たないために不登校になるものです。最近では離婚・再婚と虐待があげられます。

これら三つのタイプは、「本人要因」「学校要因」「家庭要因」と言い換えることもできます。

不登校を見立て、適切に対応するためには、まずその背景にある要因の把握が必要であるとおわかりになると思います。

「チェックリストその1」

タイプ分けチェックリスト

ではどのようにしてタイプを見立てればよいのでしょうか。経験の多少にかかわらず、だれでも見当がつけられるように、「タイプ分けチェックリスト」(七頁参照)をつくりました。

ここでは先の三つの要因に加えて、不登校がどのように始まったかという要因を組み合わせる必要があります。特別な問題も見られなかったのに急に不適応状態を示す「急性型」と、日ごろから休み

がちであったが気がついたら不登校状態になっていった「慢性型」に分けられます。そして、対応もそれぞれ「問題解決・治療型」と「教育支援型」に分けられます。

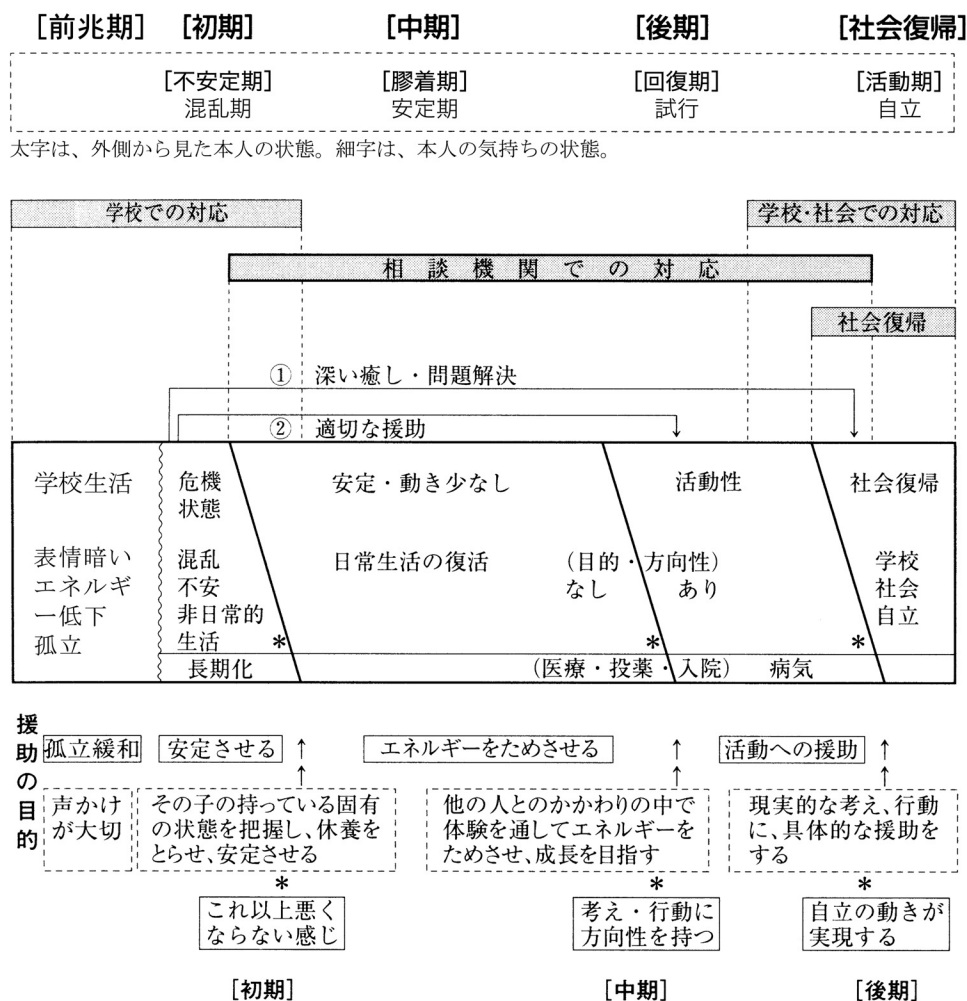
このチェックリストを使い、一人の子どもについて当てはまるかどうか○△×をつけていき、○が多くついた型がその子の不登校のタイプです。実際には○が分散したり、二か所に固まったりすることもあります。そのようなときは、ちょっと期間をおいてもう一度チェックすることや、さらに細かい情報収集が必要となります。このチェックリストは厳密な診断表ではありませんので、大まかな見当をつけるものとして使ってください。

不登校の段階

実際に不登校になると、タイプのいかんにかかわらず、ほぼ同じような段階を通過して進んでいくことがわかりました。

そのことを状態と支援に分けて段階的に図にしたのが図2です。時間とともに左から右へと移行していきます。最上段に「前兆期」「初期」「中期」「後期」「社会復帰」

図2 不登校の回復段階 (2004.5 小澤美代子)



タイプ分けチェックリスト

当てはまる・○ やや当てはまる・△ 当てはまらない・×

氏名 () 小・中・高 (年) 男・女	
A 心理的要因をもつ急性型	B 心理的要因をもつ慢性型
①感受性鋭く、深く悩む	①敏感すぎる(音・光・言葉・雰囲気)
②まじめ、几帳面である	②おとなしく、目立たない
③こだわりをもつ	③何事に対しても不安緊張が高い
④友達はある	④友達をつくるのが苦手
⑤成績は悪くない	⑤学習の基礎でつまづく
⑥思春期の不安・葛藤が強い	⑥心身ともに丈夫でない
⑦神経症的な状態を示す	⑦頭痛、腹痛などを訴える
⑧親に養育・保護能力はある	⑧親自身に不安や不安全感がある
⑨発達に問題は感じられない	⑨発達上の問題が感じられる(心理治療を要するレベル)
C 教育的要因をもつ急性型	D 教育的要因をもつ慢性型
①性格は明るく活発なほうである	①内気で自己主張が上手でない
②勉強や運動を頑張っていた	②勉強が少しずつ遅れてきた
③友達をつくる力がある	③友達関係が維持できない
④家庭環境は健全である	④家庭が過保護・過干渉である
⑤友達とのトラブルがある(いじめ等)	⑤学級崩壊を経験している
⑥教師の強すぎる叱責、厳しすぎる指導	⑥教師の指導力不足(本人に・学級に)
⑦学習の挫折(伸び悩み・急落・失敗)	⑦進級・入学等で環境の変化がある
⑧発達上の問題はない	⑧発達に弱さがある(教育的支援で改善可能)
E 福祉的要因をもつ急性型	F 福祉的要因をもつ慢性型
①家庭生活の急激な変化があった(親の不仲・病気・死・離婚・再婚・リストラ)	①家庭崩壊がある
②最近顔色が悪く、表情が暗くなった	②不安や不信の表情がある
③最近投げやりな態度が目立った	③反抗や不服従がみられる
④学習意欲が減退し、成績が急落した	④経済的に困窮している
⑤短期間に適応力が低下した	⑤親が長期的病気である
⑥親に保護をする精神的余裕がない	⑥親の保護能力(衣食住)が低い
⑦最近服装の汚れや、忘れ物が目立った	⑦虐待が疑われる
⑧発達上の問題はない	⑧発達上の問題がある(能力があっても育っていない)